

未来志向の活動を通じた居場所形成

—新しい不登校支援の検証—

代表研究者； 神崎真実（追手門学院大学 講師）

共同研究者； 相原 瞳（大阪つくば開成高等学校
教育相談支援センター長）

土岐玲奈（星槎大学大学院 准教授）

不登校支援の変化

従来の支援は、心理的居場所の形成

- 本来感・被受容感などの心理的居場所 → 学びや活動へ

近年は、社会的自立の重視、進路を見据えた支援

- 学びや活動 → 心理的居場所の確保
- 不登校経験者の入学が多い定時制や通信制高校では特に重要

本研究の目的

- 実践の展開 ⇔ データに基づく検証不足
- 本研究では、不登校経験のある高校生を対象として、未来志向の活動（居場所づくりプロジェクト）を展開し、その効果と課題を検証する。

プロジェクト概要

活動の主旨

- 不登校経験のある高校生が、小中学生へ向けた居場所づくり（単発の企画）を立案・実現する

活動内容

- 大学生ファシリテーターとともに企画会議（2時間／回）

2021年度
研究プロジェクトとして開始
高校は協力者

2022年度
本助成により継続
高校の正課外活動
へ

2023年度
高校の全面的な
協力体制

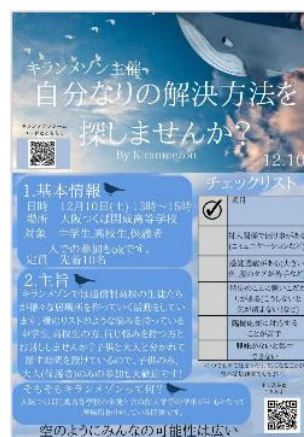
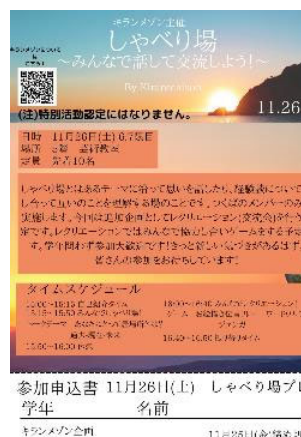
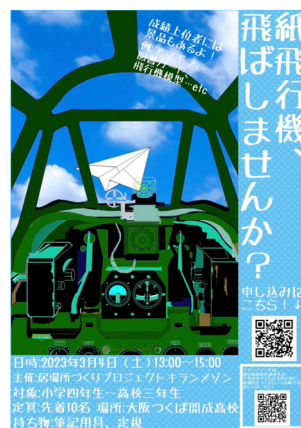
2022年度の活動状況

メンバーの数

- 高校生:14名 (+単発の見学者9名)
- 大学生7名、教員3名

活動状況

- 26回の企画会議 (2時間/回) を実施
- 高校生が立案した企画を6つ実施



分析概要

企画会議の録音データを文字起こしして、探索的に分析

1. 出席・発話率を算出し、PJへの関わり方を類型化
2. 活動度合いが低い高校生の事例分析（ポジショニング分析）
3. 支援者の役割についての分析（KJ法）

結果(1)出席・発話状況とPJへの関わり

- 出席状況の確認と発話率（会議日ごとの各メンバーの発話回数／総発話回数）の算出
- 教員・大学生の発話率は6割～7割の日が多い（範囲：38.6%～96.8%）

表1 グループごとの活動状況と発話率

グループ	4月8日	4月16日	5月13日	5月19日	5月28日	6月10日	6月16日	7月7日	7月21日	8月18日	8月27日	9月9日	10月6日	10月14日	10月21日	11月11日	11月18日	11月26日	12月16日	1月13日	1月28日	2月2日	3月10日	備考							
単発-1		3.2%							12.2%																						
単発-2																															
単発-3				7.7%																											
単発-4					0.2%																										
単発-5																															
単発-6								1.1%																							
単発-7																						1.4%									
単発-8	1.4%																														
単発-9	0.5%		0.6%																												
A-1	18.4%	18.3%		1.9%	8.8%		17.3%	6.2%			18.1%		(辞退)												6/25 ビザづくり						
A-2		5.0%		2.2%				1.8%	4.6%	5.3%	7.9%		24.4%		7.8%	22.8%	17.6%								12/10 相談会						
A-3				1.7%	10.7%	8.3%	5.3%	11.7%	9.2%	9.3%															3/4 紙飛行機						
A-4														19.6%	11.7%	12.9%	24.7%	14.6%	32.7%	39.0%	22.1%		10.2%	31.0%	11/26、3/24 シャベリ場						
A-5															10.0%			16.8%	21.1%	11.8%	26.6%	3.9%	8.2%	3/24 シャベリ場							
B-1	2.5%	0.9%		1.1%	2.3%			10.2%		1.6%							(受験)														
B-2	10.6%	8.7%	3.2%	2.8%	2.9%			1.8%	6.3%								(辞退)														
B-3		0.5%																													
B-4				5.2%	25.5%	12.4%	5.5%				6.3%	27.6%				4.2%															
C-1	1.1%	1.8%									9.4%																				
C-2		0.5%	0.6%	0.2%		2.0%	1.5%	1.3%	8.4%																						
C-3																									2.1%	2.4%					
D-1														8.3%											7.3%	5.8%					
D-2																		7.8%							5.7%	3.1%	1.2%				
教員-1	47.4%	33.0%	34.3%	25.1%	38.2%						33.1%	19.0%	4.3%	3.1%	2.5%	34.1%									16.5%	23.6%	26.2%	8/27 不登校交流会			
教員-2		2.8%	31.4%	0.8%	18.9%	43.7%	38.5%	35.8%	36.6%	21.8%	5.5%		3.3%	6.7%	2.8%	9.3%									21.9%	36.7%	29.1%	9.9%	6/2、1/7 起立性		
教員-3																4.9%				0.2%	2.4%										
ファシリ-1				2.2%	16.2%	15.2%	13.9%		28.3%		27.0%	36.8%	39.4%	35.9%	4.2%	40.7%										21.3%	0.8%				
ファシリ-2				1.1%					12.9%		18.3%				5.1%	18.2%															
ファシリ-3		2.3%		1.1%	2.2%										4.2%																
ファシリ-4		0.9%	5.5%	21.0%	12.5%	4.0%		10.2%	16.8%		8.0%				6.2%		8.9%	41.8%								49.4%	15.0%	17.7%			
ファシリ-5	20.1%	19.7%	25.5%	24.9%						25.2%			11.6%																		
ファシリ-6							9.3%																								
ファシリ-7											9.4%																				1.6%
保護者	0.5%			5.5%												7.4%															
スタッフ発話率	67.4%	59.2%	96.8%	76.2%	77.2%	63.9%	63.0%	59.9%	66.3%	75.4%	48.0%	72.4%	56.0%	49.2%	64.1%	52.5%	67.7%	41.8%	38.6%	60.4%	49.4%	70.1%	53.7%								

活動状況による発話率の違い

A: 企画あり・実現群 (n=5)

- 高発言率、自己の経験を活かして企画立案

B: 企画あり・未実現群 (n=4)

- 中発話率、2名は他の活動とのバランスを考えて脱退、1名は受験期に入り企画が実現せず、残る1名は学校退学

C: 企画なし・補助役割群 (n=3)

- 低発話率で参加は継続、自分の居場所を求めてPJに参加していた可能性

D: 企画なし・様子見群 (n=2)

- 低発話率で2022年度は様子見、翌年度に企画実現

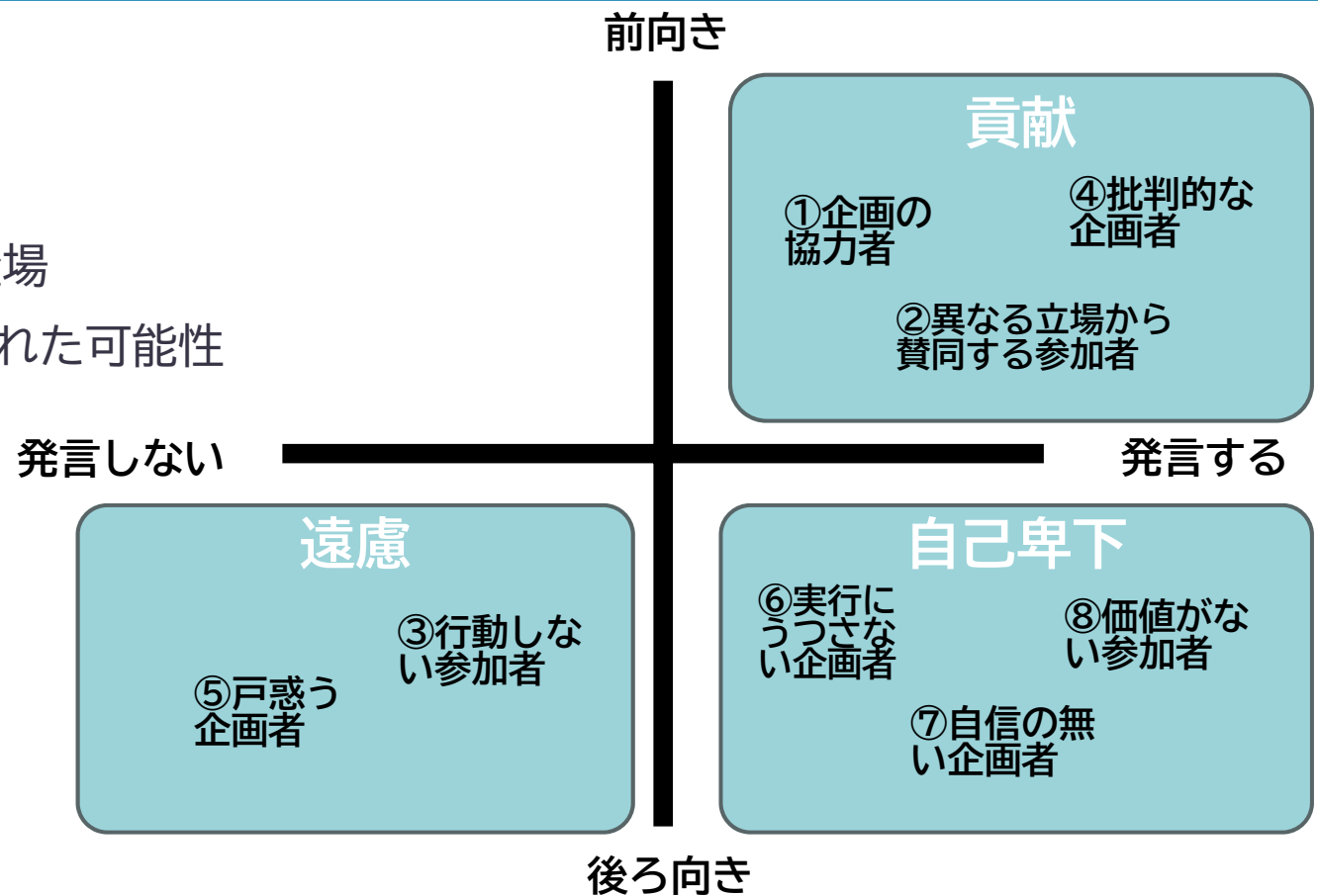
結果(2)活動度合いが低い高校生の事例分析

- A: 企画あり・実現群: 企画を通して他者との協力や調整を行っていくうちに、プロジェクト自体が高校生の居場所へ
- D: 企画なし・様子見群: 様子見をしていたが次年度に企画立案（A群へ）
- 企画は立案するものの実現しなかったB: 企画あり・未実現群、また企画を立案せず補助にまわっていたC: 企画なし・補助役割群の高校生たちにとって、居場所PJは彼らの居場所たりえていたのか？

企画が実現しなかったB群の生徒

発話のポジショニング分析

- 貢献と遠慮を繰り返していた
 - 大学受験の前後で自己卑下が登場
- ➔省察によって自己表現が促された可能性



企画立案をしなかったC群の生徒

- 高校卒業後も困難が続いていた
- 企画がないがゆえに、他者と深く関わる機会がない
- c群の生徒に対する関わりの充実・検討が課題

結果(3)大学生・教員の役割

- 活動することと休むことのバランスをどうとるか？
- 休みと活動に関連する発言をエピソードを抽出 (n=344) して分析

都度のいたわり

- ・ 教員や大学生から高校生への声かけ
- ・ 「無理をしないように」「問題がないか尋ねる」



意思表示と状況判断

- ・ 企画の話し合いでの意思表示
- ・ 「やる・できる意思」「辛さや期待の伝達」



困難の言語化（共同生成）

- ・ 辛さや頑張り、休むことの重要性を語る
- ・ 「見えにくい『しんどさ』」「頑張りすぎる」「息抜きの大切さ」

おわりに:プロジェクトの成果と今後の課題

- 居場所プロジェクトでは、企画を実現させることで進路と居場所を見出していく高校生と、企画を実現せずに関わり続ける高校生がいた（結果1）
 - こうした多様な参加は、困難を言語化したり都度のいたわりをおこなう大学生・教員の存在があっこそ（結果3）+不登校の過去を「活かす」という主旨
 - 自己卑下という形で自己表現をはじめる高校生も（結果2）
- プロジェクトには、企画を通して他者と関わり居場所を形成していく役割と、みずからの困難を認めて表現するという役割があったのかもしれない。